

## 梅、桃、桜の季節に

今年の舞鶴公園の桜は花見の規制もほぼなくなって、コロナ前よりも出店の数も多く、花見客も以前をしのぐほどの賑わいでした。桜の花は、幽玄な姿というよりも、久しぶりに訪れた花見客を喜んで迎えているようにも見えました。

15年ほど前まで、事務所が舞鶴公園の近くにあったときには、紅白の梅の木を仕事の合間に見に行ったものでした。石碑横の大きな桃の木は、毎年会うのを楽しみにしていたほどです。確定申告で疲れた頭を冷ますためには、桜の花よりも梅や桃の可憐な花の方がふさわしかったように思います。

家の中はといえば、昨年引っ越して、段飾りのお雛様を飾るスペースがなくなったので、今年の雛祭りは、娘たちが生まれたときに頂いた真多呂人形を飾っていました。人形を見ていると、段飾りの端正な顔立ちの雛人形よりも、こちらのほうが「桃」の無邪気さをよく表しているように感じます。

道元禅師は、悟りの世界を梅の花に寄せて、次のように詠んだと言われています。

春風にほころびにけり桃の花枝葉に残る疑いもなし

玄侑宗久は、この歌を桃の無邪気さがそのままに現れていると言います。春風に吹かれて吹き飛ばされてしまう、などと気にすることもなく、桃の花は無邪気にそこに咲いて、ひたすらに匂い立っているのだと。

### ■ 梅、桃、桜それぞれの趣

ところで、玄侑和尚がよく引き合いに出す「梅、桃、桜」の話は、それぞれの花の特徴をうまく表していて、なかなか味わい深いものがあります。

梅には厳しい寒さに耐えてようやく咲く、儒教的な印象があります。剪定が欠かせないところも、自らを律することをイメージさせるのです。鍛えられたごつごつの幹に咲く清廉な香りの花は、君子の風情さえただよわせています。

桜の花は、一気に咲いて一気に散る、無常であるがゆえの祝祭の印象、浄土教のイメージです。麗らかという表現がぴったりの透き通った花は、「咲く」と「麗ら」が縮まって「さくら」と呼ばれるようになったという説もあり、梅と違って意思や努力の彼方にある世界を感じさせます。

これに対して桃の花は、先に述べたように、ひたすらに無邪気さを表しています。これは、本来無一物で汚れようのなかった心に気付く、禅の世界に通じます。実際、中国の江南地方から伝わった禅は、枇杷やお茶のほか、蟠桃という桃の木も日本に伝えたのだそう

です。

むろん、禅宗には禁欲的な修行をする梅的な要素も、幽玄な桜の要素もあって簡単に図式化はできないのですが、こうやって桃、梅、桜が三様の在り方で世界を彩っていることが、世の中の見方を豊かにしてくれるように思います。

玄侑さんの話で面白いのは、こうして特徴付けられた、桃、梅、桜の花が、人の生きる姿にも映し出すことができるということです。

幼いころの無邪気な「桃」の時代が終わると、社会性を身につけるべく「梅」のように自らを律することを学び始め、そうしているうちに、世の中の無常をしみじみと感じる「桜」に触れるようになる。そんな風に「桃・梅・桜」の話は、人間の成長の過程になぞらえることができます。

こうした成長の過程で、人生は奥行きを増します。梅の規律のなかにも、桃の無邪気なまでの周囲への信頼と、桜のように異界へと深まる感性の両方がある、人生というものが奥行きをみせる、そういう人間としての振り幅をも映しているようにも見えます。

## ■ 今という時代に

玄侑さんの言うように、桃、梅、桜のバランスのとれた生き方を目指したいと思うのですが、コロナ禍の3年間を振り返ると、別の感慨も抱きます。

今20歳前後の若者たちは、3年間の自粛生活で厳しい「梅」の季節を強いられました。本来あるべき学校行事のほとんどが無くなるということも経験しています。無常というものを「散る桜」を借りるまでもなく、身にしみているのです。

ならばこそ、春風のなかに笑いが広がるような「桃」の無邪気さに、遠慮なく浸ってほしいと切に願います。コロナ禍でひととき辛い思いをした世代は、その期間に得た教訓を忘れずに、それでも信頼に足る世界に生きていることを、恐れることなく信じてほしいと思います。

話があちこちに飛んで恐縮ですが、WBCの野球を見ていて思ったのは、とにかくチームが明るいということでした。前回優勝したときのイチローのセンター前ヒットが印象的なためでしょうか、あの時の試合は自らを律する「梅」のイメージが強かったように思います。

ところが、今回の大会で村上宗隆が不振にあえいだ末に決勝打を放ったり、同点ホームランを打っても、桃太郎が無心にバットを振っているような印象がどこかにありました。栗山監督が選手を信じると繰り返していたように、最後には仲間を信じるという無邪気さが、強さを引出したのだと思います。そういった意味でも「桃」のチームが無敵の強さを誇ったのは、示唆するところが大きかったと思います。

(所長 瀬戸 英晴)